

神のみことばは、神のみことばである (9)

2006. 5. 23 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

テモテへの手紙・第二 3章15節から17節

また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのためには有益です。それは、神の人が、すべて良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

今、司会の兄弟が言われたように、昨日の名古屋でのA兄弟の葬儀は良かった！と思うのです。歌われたハレルヤコーラスは、やはり主の栄光を表わすものではないかと思いました。中西姉妹も参加されていまして安心していました。彼は指揮をすると思ったのですが、とんでもない。一番後ろの列で声高く歌っただけなのです。結局、指揮者は必要なかったのですね。これもやはり一つのすばらしい証しだったのではないかと思います。

金曜日の夜、岩手県北上のT姉妹の家で家庭集会がありました。何人集まったのかちょっと分かりませんが、大勢の方がみえました。O姉妹の働きの実のようなものだったのではないのでしょうか。O姉妹は、何年か岩手県でお勤めされていまして。いろいろな人々が見えましたし、その中で十人ぐらいの人が初めて祈るようになりました。みなさんも続けて祈ってください。

次の日、盛岡で結婚式もありました。それから引き続き札幌で喜びの集いもありました。もちろん札幌でも大勢の人々が集まりましたし、十何人かの人々も祈るようになりました。四人洗礼を受けました。

それから慌てて名古屋まで行きました。A兄弟は、自分の葬儀のために準備する時間があつたので、徹底的に準備していました。(笑) 私たちがどこの部屋に泊まるべきかまでも。例えば、彼が誰といつどこで交わったのか。そして召天した時、誰と誰に連絡しなくてはいけないか。全部書いてありました。

A兄弟の生活とは、そういうものでした。「自分なんて別にどうでもいい。周りの人々にイエス様を信じてもらいたい」そういう気持ちだったと思います。

召される何週間も前から、彼の準備した物をもっていました。「天国で会いましょう」という題で、See You Again…と。彼の証しもCD全部入っていました。葬儀に参列した方々を受付で調べてもらったのです。日曜日の夜と、昨日月曜日の三日間で、七百人以上の人が、みんなこの読み物をいただくようになりました。主は必ず今から働かれるようになります。

彼の書いた初めの文章は、「今日は、私、M・Aの前夜祈祷式、昇天式にお集まりくださ
いまして本当にありがとうございます」と記していました。(笑)

笑い話ではありません。信仰の表われではないでしょうか。

初めてA兄弟に出会ったのは、1989年7月15日だったのです。出会った場所は、
病院でした。Y・O兄弟と一緒にでした。きっかけになったのはA兄弟の奥さんであるJ子
姉妹の病気でした。A兄弟はその時45歳。奥さんは39歳でした。娘は17歳、息子は
14歳でした。A夫婦は確かに悩んだことでしょう。「どうしましょう」と。けれど二人は
ともに祈るようになりました。結果として希望が出てきました。人間は病気のために死な
ない。主の決められた時が来ると召されるのだ、と二人は確信したのです。

J子姉妹の召された瞬間は、私も病室にいました。葬儀は、12月12日でした。結局、
五ヶ月間、二人は一緒に祈る恵みが与えられ、そして二人はイエス様を証しするようにな
り、主の導きも完全であると確信するようになったのです。

ある日(別の日だったのですけれども)、再び見舞いに行きました。J子姉妹はA兄弟
に向かって言ったのです。「病気になったのは良かったね! お父さん」。A兄弟の答えは、
「あなたのおかげで…」。その意味は、もし病気にならなかったなら、救いを求めようとし
なかつたし、救い主に会わなかつたに違いありません。そうするとまことの喜びがなく、
本当の平安もありませんでした。生きる希望なしに、存在しなければならなかつたに違い
ありません。ですから、「病気になったのは良かった!」と。永遠のものを得たからです。
A兄弟もJ子姉妹も、心開いてイエス様を救い主として主として知るようになったのです。

召されてから一年後、1990年1月28日。J子姉妹の記念会のために、A兄弟から
次の案内状をもらったのです。

病まなければ、ささげ得ない祈りがある。
病まなければ、信じ得ない奇蹟がある。
病まなければ、聞き得ないみことばがある。
病まなければ、近づき得ない聖所がある。
病まなければ、仰ぎ得ない御顔がある。
病まなければ、私は人間でさえもあり得ない。

という詩のあとで彼は告白しました。

「もし、聖書を知らなかつたら、苦しみや悲しみに苛まれ、運命を呪ったことでしょう。
主イエスを信じて、J子は死の恐怖から解放され、私も生き様が変わりました。今は再び
天国でJ子とめぐりあえる喜びと、主のみこころと愛に感謝の気持ちです」。

そのような文章を書いたのです。

「彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい」。(ヘブル書13章7節)

兄弟がもし聖書を知らなかつたら、大変なことになったのではないのでしょうか。私たち
も、同じ気持ちを持っていれば幸せではないのでしょうか。

ですから、私たちは何回にも亘って、「聖書の大切さ」について一緒に考えてきたのです。神のみことばである聖書に対する態度こそ大切です。

では、聖書が自らについて証しする事がら、いわば聖書の自己紹介は何かと言いますと、「それは神のみことばである」ということです。もう少し詳しく説明すると、聖霊によって与えられ、預言者や使徒たちによって、みこころにかなって書かれたものです。聖書の要求は極めて明瞭です。すなわち、聖書は全ての部分において、一つ一つのことばにおいて、まことの神のみことばであることを主張しています。

現代社会とは、これを信じようとしません。最近、とんでもない映画も出てくるようになってしまったのです。まったく悪魔のしわざです。結局、反キリストのための準備期間にすぎません。自らの心を聖書の土台の上に立たせると、希望を持って前向きな生活をすることができます。ですから、A 兄弟はもし聖書を知らなかったら、まっ暗やみになったでしょう。何の希望も無かったに違いありません。聖書の語っているすべてが正しいか、あるいは聖書の語っていることは何一つ信頼できないかのどちらかになります。

とんでもない本、とんでもない映画を作った人々は、聖書は何と主張しているかと一秒も考えたことがないでしょう。そのような人たちとは、結局、神を畏れていない人々であり、その人たちを待っているのは永遠の滅びです。

人間は誰でも、聖書に対して根本的な決断をしなければなりません。つまり、誰でも、聖書に対してはっきりした立場を取らなければならないのです。みことばに対する私たちの立場は、もちろん一人の人格者であられる御子イエス様に対する立場です。イエス様を信じ、イエス様を愛するようになる人は、もちろん聖書を信じ、聖書が大好きになります。

主なる神は、聖書を通して、私たち人間にお語りになっています。主なる神は、聖書を「わがことば」と呼んでおられます。主なる神は、また、御子を通してお語りになったのです。ですから、イエス様も新約聖書について、「わたしのことば」という表現をよくされたのです。みことばに耳を貸さないということは、みことばをお語りになられている主なる神を無視することです。

先に述べましたように、聖書は三つの要求をもって人間一人一人に迫ってきます。すなわち、

1. 聞きなさい。
2. 信じなさい。
3. 従いなさい。

ということです。

1. 聞きなさい。

まず聖書の要求、すなわち「聞きなさい」という要求について、先日考察してきました。そして聖書全体は、人間に対して「聞きなさい」というはっきりとした要求をもっていま

すし、また命令そのものとなっています。しかしながら、この要求を人間が聞くことができなければ悲劇的です。みことばだけが私たちの心の耳を開いてくださるということは、まさに主のみことばの力です。

イザヤ書 1章2節前半

天よ、聞け。地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。

28章23節

あなたがたは、私の声に耳を傾けて聞け。私の言うことを、注意して聞け。

55章3節

耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたとこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。

ヨハネの黙示録 1章3節

この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。

と書いてあります。数えきれないほど繰り返し、「聞け」「聞きなさい」という表現が出てきます。

2. 信じなさい。

すなわち、「神のみことばであるみことば」という啓示が根本的な土台です。私たちにとって一つの事実が理解できてもできなくても、認めざるを得ないのです。主なる神は、人間に「信仰」を要求しておられるのです。私たちがまずすべてのことを理解して信じる、ということを期待していらっしゃるではありません。みことばですから「信じなさい」。

主の真実を体験するためには、ただ一つの道、すなわち「信仰の道」だけが存在しています。「救いに至る信仰」とは、絶対者である主なる神を百パーセント信頼することであり、主の権威を百パーセント認めることです。主なる神が絶対者であられるから、私たちは信じるのです。この信仰は、いかなる証拠も保証も証明も必要としません。

靈感の問題については、理解したり証明したりしてから信じるというようなものではなく、ただ単純に信じるのが大切です。主なる神の切なる願いは、人間がみことばを百パーセント信じることです。

前に開いた箇所ですが、創世記15章6節に、「アブラハムは主を信じた」と記されています。一人の人間がアブラハムのような態度を取ると、天において大いなる喜びがあるのです。主のみことばを信じることは、今日の私たちと同じように、アブラハムにとっても簡単なものではなかったのです。昔の信者たちは、信仰によって生き、歩いて行こうとしました。彼はただみことばにだけ頼ったのです。

イスラエルの民の悲劇は、主のみことばが預言者たちの口を通して与えられていながら信じようとしなかったこと、信じたいと願わなかったことでした。聖書のどこを見ても、イスラエルの民が、主のみことばを信じることができなかつたと記されてはおらず、信じようとしなかつたと記されているのです。

信じたいと思えば、人間の持っていない「信仰」も与えられます。ですからイエス様を信じるしかないと言われていました。「求めよ。そうすれば与えられます」と。

イスラエルの民の悲劇とは、結局、みことばよりも自分の思っていることを大切にしたいということです。

例えば次のように書いてあります。

エレミヤ書 25章3、4節

アモンの子、ユダの王ヨシヤの第十三年から今日まで、この二十三年間、私に主のことばがあり、私はあなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞かなかつた。また、主はあなたがたに、主のしもべである預言者たちを早くからたびたび送つたのに、あなたがたは聞かず、聞こうと耳を傾けることもなかつた。

7、8節

それでも、あなたがたは私に聞き従わなかつた。— 主の御告げ。— それで、あなたがたは手で造つた物でわたしの怒りを引き起こし、身にわざわいを招いた。それゆえ、万軍の主はこう仰せられる。「あなたがたがわたしのことばに聞き従わなかつたために、

パウロは、イスラエルの民のとつた態度について、まとめて次のように言つたのです。
ローマ人への手紙 10章21節

イスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」

そしてこの不信仰の恐ろしい結果は、イスラエルの歴史に表われています。

イエス様は、この地上において、生涯の間、イスラエルの民、パリサイ人、聖書学者、律法学者、弟子が神のみことばを信じるようにと、どれほど一生懸命になられたことでしょうか。

イエス様がいつも繰り返し、仰せになつただ一つのことは、主のみことばとご自分のお語りになつたことに対する人間の不信仰でした。

ヨハネの福音書5章を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 5章46節、47節

「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずですが。モーセが書いたのはわたしのことだからです。しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」

復活された主イエス様は、エマオへの途上で、主のみことばに対する弟子たちの不信仰について、真剣に弟子たちにお語りになりました。よく知られているルカ伝24章の中に記されています。二、三節だけ読みます。

ルカの福音書 24章25節から27節

するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」それからイエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

とあります。

主は今日、信者たちの不信仰について何とおっしゃるのでしょうか。ヨハネはその第一の手紙の5章10節に次のように記したのです。

ヨハネの手紙・第一 5章10節

神を信じない者は、神を偽り者とするのです。

このみことばは、私たちにとって何と重大な意味を持っていることでしょうか。これは、今日の信者及び、イエス様のからだなる教会の負い目です。すなわち、聖書以外のことはすべて、主を偽り者とするのです。私たちは何と深くこの罪の中に入り込みやすい者でしょうか。

私たちは大きな問題がなければ、確信を持って、聖書は神のみことばであると言い切ることができません。大きな困難が襲ってくると、みことばに頼ることをやめ、主の御約束に信頼することができないようになってしまいます。ですから私たちは、困難に直面したときに、主のご栄光を辱めたり、傷つけてしまうような結果になったとすれば、悔い改めましょう。

今日、もっとも必要とされているものは、みことばに対する信仰と信頼の回復であり、すべてを主に明け渡すことにより、聖霊に満たされることです。私たちは自分の不信仰と疑いによって主を悲しませたことを、正直に言い表わして悔い改めるべきです。私たちは主に対する不信仰という罪を、主の血潮によって洗いよめていただくのではないのでしょうか。信仰から生まれて来ないものはすべて罪であると聖書は言っています。主に頼らない人生も罪です。けれども、主はあらゆる罪を赦したいと切に願っておいでになります。そして主は、赦してくださると再び回復してくださり、用いてくださるはずで

今まで私たちが間違っ

て用いていた「みことばという剣」を、主は再び私たちに返して

救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

神のみことばはひとつの剣のようなものである、とあります。すなわち、聖書全体を、「御霊の剣」として私たちに与えていただきます。私たちが悪魔の巧妙な攻撃に抵抗し、悪魔の虜から解放されたいと願うなら、「みことば」というこの剣がどうしても必要となるのです。主はみことばを、私たちにも与えてくださったのです。

ヨハネ伝を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 17章8節

それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたから出て来たことを確かに知り、また、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

信仰の土台とは結局、みことばです。繰り返し、繰り返し言われたように、「信仰こそ」が、もっとも必要とされているものなのです。信仰の前提条件は、本当の意味で「聞く」ことです。なぜなら、本当に、聞くことから信仰は始まるからです。

パウロは、

ローマ人への手紙 10章17節

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

みことばの提供は、同時に信仰の提供です。だれでもこの提供されたものを受け入れるか、拒否するか、まったく自由です。

聞くことと信じることは、密接に結びついています。聖書の作者である聖霊は、神のみことばを通してまことの信仰を引き起こします。聖霊は主のご臨在を明らかにし、イエス様の栄光を現わしてくださり、それによってまことの信仰が生まれてきます。

コリント第一の手紙の2章を読むと、パウロはコリントにいる兄弟姉妹たちに次のように書いたのです。

コリント人への手紙・第一 2章10節

神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

とあります。

まことの信仰とは、主イエス様に対する信仰、また、主のみことばに対する信仰です。まことの信仰とは聖霊の働きの結果ですが、しかし人間が信じたくなければ、聖霊の働く余地はありません。だれでも自分の力で信じることはできませんが、みことばに対して心を開くことはできます。

人間が信じるか信じないかは、意志の決断であり、理性の問題ではありません。信仰は主によって引き起こされますが、信仰は決して強制ではなく、みことばの働きに対する私たちの意志の肯定です。したがって、私たちが信じたいと思うかどうかという一つのことだけが大切です。

信じるとは、受け入れることであり、主のみことばを真理として受け入れることです。すなわち、みことばを受け入れることは、みことばをお語りになった方を受け入れることなのです。そしてみことばを受け入れることは、イエス様を受け入れることにほかなりません。

パウロがテサロニケに行ってから、三週間以内に、大ぜいの人々が導かれ、救われたのです。あとで彼らに次のように書くことができたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 1章6節

あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。

みことばを受け入れることによって、まことの喜びが生まれてきます。

ヨハネは、「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には神の子どもとされる特権をお与えになった」と記しています。「受け入れると救われる」と、はっきり書かれています。

神のみことばを受け入れてほしい、信じてほしいということこそ、主の命令です。イスラエルの民は、イエス様を受け入れようとしなかったのです。主はいつの時代でも信じる人々、すなわち、ご自身を信じ、みことばを信じる人たちを捜し求めておられます。

前に話しましたように、「アブラハムは主を信じた」と聖書は記しています。弟子たちが信じたとき、イエス様の心に何という喜びが起こったことでしょうか。

ヨハネの福音書 16章31節

イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。」

「長い間かかったけれど、今、信じているの？」

イエス様は何度も、何度も、「わたしのことばを聞いて信じる者」という表現をお使いになりました。例えば、

ヨハネの福音書 5章24節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

M・A兄弟は、なぜ安心して、喜んで死ぬことができたのでしょうか。さばきに会うことがないと分かったからです。人間はいつか死ななくてはなりません。けれども、「死んでからさばきを受ける」と聖書ははっきり記しているのです。それだけではなく、死んでからさばかれる人のためには救われる可能性がなく、おしまいです。待っているのは永遠の暗黒です。喜びなし。平安なし。永久的に存在することとは想像できません。

けれども、「信じる者は永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」と。

よく知られている3章16節も、同じ事実を語っているのです。

3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「世を愛された」とは、私を、あなたを、愛されたのです。

人間は、滅びるか永遠のいのちを持つかのどちらかです。

6章47節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。」

「わかった人々」「理性をもって仕えた人々」と書いていないのです。

35節

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことはありません。」

7章38節

「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

14章12節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。」

信仰は、主のみことばに対する鍵のようなものです。

- ・信仰者には、みことばが開かれます。
- ・信仰者は、見えない世界を見ることができるのです。
- ・信仰者は、開かれた天国を体験します。

イスラエルの民については、彼らの不信仰のゆえに、彼らは約束の地カナンに入ることができなかつたと記されています。

ヘブル書の著者は次のように書いたのです。

ヘブル人への手紙 3章19節

それゆえ、彼らが安息にはいれなかつたのは、不信仰のためであったことがわかります。

主の責任ではありませんでした。イスラエルの民は、主の約束を信じられませんでしたし、信じようとしなかつたからです。

イエス様もみことばに対する弟子たちの不信仰を何度もお責めになりました。

前に読みましたルカ伝24章。イエス様はエマオへ行く弟子たちに言われたのです。
ルカの福音書 24章25節から27節

するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

みことばを信じないことは、主イエス様に対して自分の心を閉ざすことになります。
主が要求しておられるのは、今話しましたように、
まず、「聞け」。聞く耳を持つことこそが要求されています。
二番目に、「信ぜよ」という要求です。

3. 従いなさい。

もう一つ、最後に「従え」という要求、また、みことばの要求です。みことばを受け入れる者は、みことばの力を体験します。従うとは、聞いたことを行なうことであり、約束されたことを経験することです。なぜみことばが与えられたかと言いますと、それを行なうためです。ですから、聖書の命令は、「行ないなさい」ということです。

例えば、申命記4章を読むと次のように書かれています。もちろん、イスラエルの民に対する命令です。

申命記 4章1節、2節

今、イスラエルよ。あなたがたが行なうように私の教えるおきてと定めとを聞きなさい。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えようとしておられる地を所有することができる。私があるあなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。私があるあなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない。

5節、6節

見なさい。私は、私の神、主が私に命じられたとおりに、おきてと定めとをあなたがたに教えた。あなたがたが、はいつて行って、所有しようとしているその地の真中で、そのように行なうためである。これを守り行ないなさい。そうすれば、それは国々の民に、あなたがたの知恵と悟りを示すことになり、これらすべてのおきてを聞く彼らは、「この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ。」と言うであろう。

山上の垂訓の中で、イエス様は同じ事実を明らかにしてくださいました。

マタイの福音書 7章24節

だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。

イエス様のように、みことばの大切さについて話した方はいません。

ヤコブ書の中でも、同じことが繰り返し、繰り返し書かれています。確かにある人々は、このヤコブ書はちょっと難しい手紙だ、大変だと言います。いろいろなことが命令されているからです。ですが、そういう人々は、救われるためにああしなくてはいけない、こうしなくてはならないと思っているだけです。ヤコブ書の言いたかったこととは違います。内に住まわれるイエス様が働くことがおできになるなら、このようになるということです。

ヤコブの手紙 1章22節

また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。

2章17節

それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

26節

たましいを離れたからだが、死んだものであると同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。

結局、イエス様のいのちが現われなければ、単なる頭の知識だけでは、役に立ちません。

使徒行伝6章7節にまた次のように書かれています。初代教会の受けた祝福についての個所です。

使徒の働き 6章7節

こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。

とあります。

また、ヨハネ伝4章50節に、イエス様は次のように言われました。

ヨハネの福音書 4章50節

「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。

とあります。

イエス様のみことばを信じることこそ大切です。従うこととは、主のみことばに従って、主ご自身に従うことを意味します。みことばは人生を変えてくれます。

「光よ、あれ」と主が言われると、光が生まれたのです。従おうと思う人は、みことばの力を経験するようになります。

パウロは、コリントにいる兄弟姉妹に次のように書くことができたのです。

コリント人への手紙・第二 3章2節、3節

私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心にしるさされていて、すべての人に知られ、また読まれているのです。あなたがたが私たちの奉仕によるキリストの手紙であり、墨によってではなく、生ける神の御霊によって書かれ、石の板にではなく、人の心の板に書かれたものであることが明らかだからです。

この学びの間に、何回もペテロの証しを引用しました。本当にすばらしいことばです。
ペテロの手紙・第一 1章23節

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生けるいつまでも変わることはない、神のことばによるのです。

祝福の土台は、言うまでもなく主のことばです。

「聖書はこう言っています」。「聖書は何と言っていますか」。パウロは、よくこの表現を使ったのです。

- ・私の思っていることは大切ではない。
- ・聖書は何と言っていますか。
- ・彼に信頼する者は失望させられることがない。
- ・みことばに頼る者は、奇蹟を経験します。

聖書とはいったい何なのでしょう。

確かに今まで、多くのいわゆる有名人はこの問いについて考えたことがあります。

- ・ドイツの宗教改革者であるマルティン・ルターは、「聖書は古いものでもなければ、新しいものでもない。永遠なるものだ」と言ったのです。
- ・イギリスの物理学者、また数学者であるニュートンは、「いかなる世界歴史におけるよりも、聖書の中にはより確かな真理が存在する」と確信をもって言ったのです。
- ・ドイツの詩人であり、政治家でもあったヴォルフガング・ゲーテは、「私が獄に繋がれ、ただ一冊の物を持ち込むことが許されるとしたら、聖書だ」と言いました。
- ・フランスの総理大臣であるナポレオンは、「聖書は単なる書物ではない。それに反対するすべてのものを征服する力をもつ生き物である」と言いました。
- ・インドの総理であるガンジーは、「私の生涯に最も深い影響を与えたのは、聖書そのものだ」と。
- ・アメリカのリンカーンは、「聖書は神が人間に賜った最もすばらしい賜物である。人間の幸福にとって望ましいものはすべて、聖書の中に含まれている」と言ったそうです。

たぶん、ゲーテもナポレオンもガンジーも、救われてはいなかったでしょう。しかし、やはり聖書はすごい！と認めざるを得なかったのです。

聖書に出てくる人々の証しは、もっと大切ではないでしょうか。

ダビデは、

詩篇 119篇105節

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

と証しました。

パウロは、

テモテへの手紙・第二 3章15節後半

聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができる。

と書いたのです。

人間はだれでも、心のよりどころ、心の平安、まことの喜び、人生の内容、また目的、そして生き生きとした希望をもつ必要があります。そしてこれらのものはただ聖書を通してのみ、与えられるのです。まことの救いにあずかった人々は、主のみことばである聖書を通して救いに導かれ、また、主との平和、絶えざる喜び、そして永遠のいのちをもつようになりました。だからこそ、聖書は祝福の土台そのものなのです。

パウロは、ローマ書の中で書いたのです。

ローマ人への手紙 10章11節

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

「聖書は何と言っているか」、これこそ大切です。すなわち、人間の考えていること、思っていること、感じていることは、決して大切ではありません。「聖書は何と言っているか」と考えると、必ず答えが出ます。楽になります。このみことばで言いますと、大切なのは、人間の考えていること、思っていること、確信していることよりも、「聖書は、神のみことばは、何と言っているか」ということです。

聖書は、主ご自身が語られたことをそのまま私たちに伝えていますが、聖書に書かれているのは、事実のみです。それを人間が認めようが認めまいが、関係ありません。事実が事実です。

何があっても、私たちがいつも覚えるべきことは、聖書は主のことばであり、みことばは主ご自身の啓示だということです。単なる教理、学説ではありません。主ご自身の啓示そのものです。ですから、聖書を読む時に大切なことは、いわゆる研究することや、知識を得るためではなく、イエス様をよりよく知ることなのです。より親しい交わりを得るためであるべきです。

また、理解力をもって聖書を理解しようと思えばうまくいきません。当時のパリサイ人、聖書学者たちは、そのような読み方をしました。ですからイエス様はお喜びになられませんでした。かえって厳しく言われたのです。

ヨハネの福音書 5章39、40節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

これこそ悲劇です。聖書の単なる教理が大切なわけではありません。イエス様ご自身が、大切です。なぜなら、イエス様が、「聖書がわたしについて証言している」と言われたので、大切です。「わたしのことばは、永遠に残る」とイエス様は約束なさいました。

聖書を読むことと、いのちを得ることとは、本当は一つなのです。二つのものではありません。

ですからモーセは、当時のイスラエルの民に言ったのです。すばらしいことばです。
申命記 32章47節前半

これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。

またパウロは、
テモテへの手紙・第二 3章16節

聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

と書いたのです。

聖書全巻は、主の息が吹き込まれることによって書かれたものです。主の感動により、主の息吹により、靈感によって書かれた書物です。ですから、聖書は主なる神の教えではなく、主なる神の啓示そのものです。

主は、みことばをもってご自身を現わされます。主のことばは、私たちにとっていのちのパンでなければなりません。なぜなら、聖書は教理や真理の原則を語っているというよりも、「いのちのパンそのもの」だからです。

ですからイエス様は、
マタイの福音書 4章4節

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」

と言われたのです。

エレミヤは、いつも攻撃され、憎まれ、迫害されました。けれども彼はいつも元気でした。その秘訣とは、彼は「みことばを食べた」からです。

エレミヤ書 15章16節

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

ダビデも同じことを経験しました。

詩篇 119篇162節

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

この態度を取る者は、必ず大いに祝福されるようになります。

了